若越郷土研究　六十四巻一号

福井県における郷土史研究の動向

平成三十年度分

本会事務局編
（福井県立図書館郷土資料グループ）

はじめに

平成三十年度は、元号が明治に改められて百五十年という節目の年であり、また幕末から明治にかけて松平春嶽や橋本左内など福井ゆかりの先人が活躍したこともあって、県は「幕末明治１５０年博」を開催した。これにあわせて県内の博物館や美術館でも関連した企画展が行われた。

以下、平成三十年度に刊行された主な出版物を紹介し、県内郷土史研究の動向としたい。なお敬称は略させていただいた。

一　歴史・自治体史・地域史・史跡調査報告書

大野市は『大野市史第一五巻 通史編上』を刊行し、原始から近世に至る大野市の歴史をわかりやすく解説した。四二年あまりの歳月をかけた市史の編さん事業はひとまず完了する運びとなった。高浜町教育委員会は『高浜町誌』（昭和六十年刊）の補完版に位置づけられる『高浜町史 資料編（絵図・書画・絵葉書・古写真）』を刊行した。

福井県郷土誌懇談会は『越前・若狭の戦国』（岩田書院）を発刊した。会誌以外の刊行物としては実に三十数年ぶりとなる。Maren A. Ehlers *Give and Take: Poverty and the Status Order in Early Modern Japan* (Harvard East Asian Monographs) は、近世大野の地域社会史について十四年をかけて分析した一冊。山田雄造は『勝山三町の戸数・人口の推移と幕末期の屋号』をまとめた。吉永昭『御家騒動の展開』（清文堂）は、越前藩、福井藩における家臣団の形成・分裂についてまとめた大著。楠戸義昭『激闘！賤ケ岳』（洋泉社）は、豊臣秀吉と柴田軍の行動を解析する。日本海地誌調査研究会は『人道の港 敦賀』を六年ぶりに全面的に改訂し、難民女性を治療した医師についての新たな証言を追加した。外岡慎一郎『「関ケ原」を読む』（同成社）は、大谷吉継、石田三成ら戦国武将の手紙から合戦の真相にせまったもの。真柄甚松は『府中城と前田利家』を刊行した。

鯖江市吉川地区は『吉川地区史』を六年がかりで刊行。岩本喜代英は『福井県大野市阪谷郷のあゆみ』を製作。永平寺町吉峰地区は『吉峰区の今昔』を刊行した。今庄宿プロジェクト協議会編『年代録見聞記』は、今庄宿の大工の棟梁が天保五年～明治七年に今庄や近隣で起こった災害、事件、日常の出来事などを記録したものの翻刻。北潟歴史探訪の会編『復刻版 北潟村誌』は、昭和十一年にガ

リ版刷で出版された同書を活字に置き換え、新たに資料編を加えた。村の歴史懇話会は『ふるさと文殊 農村の文化と伝承』をまとめた。かつやま子どもの村中学校の生徒による『中学生が書いた消えた村の記憶と記録 増補』（黎明書房）は、四年前に刊行した前著に新たに消えた村の調査を加筆したもの。

主な発掘報告書に、『文化財調査報告 第四一集』（福井県教育委員会）、『大畑遺跡』『犬見古墳群』（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター）、『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告一六』『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡劣化対応事業報告』（福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館）、『福井城跡二二』（福井市教育委員会）、『今北山古墳群・磯部古墳群・弁財天古墳群 範囲内容確認調査総括報告書』（鯖江市教育委員会）、『越前市内遺跡発掘調査報告書』（越前市教育委員会）などがある。

二 目録・人物・ガイドブック

福井県文書館は『福井藩士履歴6』を刊行し、巻末には町田明広による解説が寄せられた。

中島美千代『釈宗演と明治』（ぷねうま舎）は、明治時代に欧米に初めて「禅」を紹介した釈宗演の功績と人間味あふれる魅力を紹介する。高島正嗣『ＺＥＮ 釈宗演 上・下［漫画］』も宗演の生涯を漫画で描く。村上北洲顕彰会編『勤皇僧 村上北洲小伝』は、幕末明治に活躍した北洲にスポットを当てる。山田邦紀は『岡田啓介』（現代書館）を上梓、福井県が生んだ総理大臣を様々な観点から見つめ直す一冊。徳永洋は『発見！感動！！横井小楠』（平成十二年刊）の増補版となる『没後１５０年横井小楠探訪～西郷を動かした男～』を出版した。小楠については、小島英記『評伝横井小楠』（藤原書店）の出版もあった。角鹿尚計『由利公正』（ミネルヴァ書房）は、後世に発見された資料などによる最新の情報を盛り込んだもの。同じ幕末福井藩関係では、前川正名『橋本左内その漢詩と生涯』（三重大学出版会）も出版された。堀大介は、白山や越知山を開いたとされる泰澄に関する研究を『泰澄和尚と古代越知山・白山信仰』（雄山閣）にまとめている。龍野勝彦『君、それはおもしろい はやくやりたまえ』（日経ＢＰ社）は、戦後の日本医学界を牽引した医師・榊原仟の言葉を集約したもの。生涯を日露親善に捧げた故戸泉米子の自伝『リラの花と戦争』が、著者と親交のあった極東連邦大学のゾーヤ・モルグン助教授らによってのロシア語版に翻訳された。

ウララコミュニケーションズはムック『高浜Ｄａｙｓ』を発行。高浜町の協力のもと約一年がかりで製作したもの。台湾の雑誌「秋刀魚」編集部は福井の魅力を伝える特別号『青花魚（さば）』を出版。記事には日本語も併記されている。

三 各分野団体史

各分野団体史では、福井県教育委員会『福井県教育委員会70年史』、仁愛女子高等学校『創立１２０周年記念誌 和』、福井県高等

学校野球連盟『福井県高校野球70年史』、福井県自然観察指導員の会『30周年記念誌』、福井県還暦軟式野球連盟『設立20周年記念史』、東京福井県人会『東京福井県人会百二十年のあゆみ』、『見守り 青少年育成福井市民会議宝永支部設立30周年記念誌』、『「坂井市春江町」大石地区まちづくり協議会10年の歩み』などが刊行された。

四　宗教・教育・民俗

永平寺が刊行した『永平寺建造物調査報告書』は、歴史的建造物の調査結果とその文化財的考察をまとめたもの。また『永平寺史料全書 文書編 第3巻』も発行された。正覚寺は開創六百五十年を記念して『正覚寺史』を刊行した。笹下利行『具会一処 善性寺の歩み』は、移住住職によって廃寺を免れた同寺の歴史を門徒総代がまとめたもの。

『明治前期中学校形成史 府県別編4』（梓出版社）には、熊澤恵里子「福井県の中学校形成史」を収める。「だから、福井」プロジェクト・チームが作成した『だから、福井で働きたい。』は、大学教員や学生たちが福井で働く十五人にインタビューし福井で暮らす魅力をまとめている。

若狭町伝統文化保存協会は、嶺南地域で行なわれている伝統芸能「王の舞」を後世に残すため『福井県若狭町の王の舞』を発行。滋賀県立大学人間文化学部地域文化学科市川研究室では『犬熊・西小川・常神の民俗』を作成、学生たちによる小浜市や若狭町の三年にわたる民俗調査をまとめた。

五　自然科学

勝山市が発行した、平成三十年の大雪の記録誌『平成三十年豪雪』は、巻末に当時の新聞記事や記録写真を収める。上山昭博は『地震学をつくった男・大森房吉』（青土社）を上梓、福井市出身で明治・大正期を代表する地震学者大森房吉の生涯を追った。三井紀生『越前笏谷石』は、三十年にわたる笏谷石研究の総集編。福井県立恐竜博物館が監修した『ドクター・ヨッシーのほねほねザウルス恐竜博物館』（岩崎書店）は、カバヤ食品とコラボした子ども向け資料。中川毅『人類と気候の10万年史 過去に何が起きたのか、これから何が起こるのか』（講談社）は、年縞という過去の精密な記録から気候変動のメカニズムに迫り、人類史のスケールで現代を見つめ直す。奥野紀久子は『蟲の世界は遠く遙かな大星雲』を刊行、奥野宏（故人）のヤシャゲンゴロウに関する手記をまとめている。

六　工業・土木・建築

はたや記念館ゆめおーれ勝山は『近代の産業・インフラ・都市』を発行。勝山市に数多く残る近代化遺産の保存と活用を考える。文化財建造物保存技術協会が刊行した『重要文化財旧木下家住宅保存修理工事報告書』は、勝山市に残る旧木下家住宅の半解体修理工事

の概要や記録をまとめたもの。市川秀和・朝日海秀は、福井出身の建築家五十嵐直雄の基礎資料として『建築家・五十嵐直雄と真壁の意匠』をまとめた。

七　産業・芸術・文学

福井県は『越前海岸の水仙畑　文化的景観保存調査報告書』を作成し、福井市・越前町・南越前町と連携しながら越前海岸における水仙畑の文化的景観への選定を目指す。宮地哲三は『下牧谷発兼業農家の言い分』を出版。仁愛大学人間生活部の伊東知之が学生とともに制作した『福井の特産品絵本図鑑』は「福井の食」の子ども向け教材。伊東は、越前和紙の伝説を基にした絵本『越前和紙物語』も制作している。北陸経済連合会編『北陸のシェアトップ１５０』は、北陸地域のものづくり企業の国内外で高いシェアを誇る製品について紹介する。佐野光臣『鹿谷の藺草と莫蓙』はイグサやゴザに関する研究論文、民俗誌、新聞記事等をまとめたもの。田辺義郎は『漁師のひとりごと』を発刊、漁師である同氏が普段目にしている魚などをスケッチし文を添えた。

福井ゆかりの近世絵画については、辻惟雄『岩佐又兵衛　血と笑いとエロスの絵師』（新潮社）が出版された。

福井新聞社は五十年ぶりに福井県で開催された国民体育大会の写真集『福井国体・障スポ２０１８報道写真集』（同社）を刊行した。前川幸雄『「東篁遺稿」研究』（朋友書店）は、福井藩の学問の開祖といわれる儒学者・吉田東篁が残した漢詩文の研究書。

八　歴史研究施設の動向

最後に各施設の主な特別展を紹介する。県文書館は「発掘！明治を拓いた意外な福井藩士たち」、県立歴史博物館は「福井震災７０年…記録と記憶を未来へつなぐ…」「幕末維新の激動と福井」、県立若狭歴史博物館は「うきたつ人々―幕末若狭の祭礼・風俗・世相―」、一乗谷朝倉氏遺跡史料館は「戦国の輝き―朝倉氏ゆかりの名刀降臨―」、県立美術館は「幕末明治のアートシーン」、県立こども歴史文化館は「明治ふくいのフロンティア―テキスタイル＆メガネ―」、福井市立郷土歴史博物館は「江戸・京・大坂と城下町福井」「皇室と越前松平家の名宝―明治美術のきらめき―」、敦賀市立博物館は「水戸天狗党敦賀に散る」、大野市博物館は「藩政改革を支えた面谷銅山」、みくに龍翔館は「幕末維新の知られざるヒーロー列伝」、織田文化歴史館は「幕末明治の越前町」をそれぞれ開催。展示図録が作成された特別展もある。

以上、個人史、論文抜刷など割愛した資料や、漏れた資料についてはお許しいただきたい。

（事務局　前田眞佐子）

懇談会通信

□新会員（敬称略）

奥野　信一　　岸本　三次　　北村　明恵
木村孝一郎　　角鹿　尚計　　水野　佑一
村山　典子

□新役員の選定と会則の改定

令和元年七月二一日に開催された総会において、元年・二年度の役員が選定され、あわせて会則の一部が改訂されました。別添資料をご参照ください。

□会員近刊・近著紹介

（すべて二〇一九年刊）

石川美咲「越前と土岐明智氏」（『美濃源氏土岐氏研究講座・武家文化歴史回廊講座講義録』美濃源氏フォーラム事務局本部）
石川美咲「平成29年度購入資料『濃州土岐数城記』について」（『一乗谷朝倉氏遺跡資料館紀要』二〇一七）
大越良裕「伊達輝宗家臣遠藤基信と連歌」（遠藤ゆり子編著『戦国大名伊達氏』戎光祥出版）
岡田健彦『大野藩の蝦夷開拓について』私家版
金田久璋「民俗学と現代詩」（『みやざき民俗』七一号）
金田久璋「若狭湾の津波伝承」（『北陸の民俗』二九集）
岸本三次「駄洒落」（『かにかくに』七号）
金田久璋「ニソの杜と日本人の祖霊信仰」（『ニソの杜と先祖祭り』おおい町教育委員会）
木村孝一郎「越前窯跡群における中世前期の生産構造と段階的変遷」（佐々木達夫編『中世陶磁器の考古学 第一〇巻』雄山閣）
国京克巳（編）『福井城山里口御門復元整備事業報告書』福井県
国京克巳「正覚寺本堂と作事大工」（『日本建築学会北陸支部研究報告書』六二号）
久保智康「唐物と擬唐物」（『淡交別冊 数寄日本の心とかたち』七五号）
久保智康「春日厨子の系譜における木村定三コレクションM６１６《黒漆厨子》」（『愛知県美術館研究紀要』二五号）
久保智康「比叡山里坊の成立と拡充」（『叡山学院研究紀要』四一号）
藏原三雪（共著）『スクール・セクシュアル・ハラスメント』八千代出版
田中宣一「伝承文化の比較研究と移籍調査」（『民俗学研究所紀要』四三号）
角鹿尚計「大安禅寺と橘曙覧」（『大安禅寺の名宝』福井市立郷土歴史博物館）
角鹿尚計（執筆監修）『橋本綱常先生って知ってるかい？』日本赤十字社福井支部
徳満悠「十五・六世紀における山城国宇治の都市構造とその変容」（『年報中世史研究』四四号）
枥谷洋子「福井弁で語りつぐ福井の昔話」（『子どもと昔話』五〇号）
中島嘉文「『養生七不可』の現代語訳について」（『近代医学を拓いた杉田玄白』杉田玄白没後二〇〇年記念事業企画検討委員会）
長野栄俊「天心の父」（『てんしん』一九号）
野尻泰弘「史料集の効用」（『福井藩士履歴７子弟輩』福井県文書館）
野尻泰弘（共編）『佐倉藩幕末分限帳』明治大学駿河台キャンパス文学部野尻研究室
橋本紘希「長慶天皇陵候補地の上申に関する一考察」（『リサーチ福井』リサーチ福井編集委員会）
真柄甚松『関義臣』私家版
三ツ井崇「三・一運動研究の諸相」（『歴史評論』八二七号）
村上雅紀「幕末に生きた学僧 上野丹山」（『越前町織田文化歴史館研究紀要』四集）
本川幹男「由利公正（近代日本を作った一〇〇人）」（『機』三二七号）
山田裕輝「新刊紹介・神谷大介著『幕末の海

軍：明治維新への航跡』」（『明治維新史研究』一六号）

『武生古文書覚』一九集、武生古文書の基礎学習会（佐藤圭「随想 古文書の読み方」、池田正男「未活字化の俳書『越府』嘉永五年版の翻刻」、同「門跡寺院青蓮院毫摂寺との関わりの一端」）

『幕末明治福井一五〇年博講演録』幕末明治福井一五〇年博実行委員会（田中孝志「藩政改革を支えた面谷銅山」、田中信卓ほか「パネルディスカッション・四賢侯の交流と絆、歴史的役割」、村上雅紀「幕末に生きた学僧 上野丹山」、中島嘉文「『草莽』志士の先駆者・梅田雲浜」、野尻泰弘「鯖江藩と明治大学創立者・矢代操」）

『福井県文書館研究紀要』一六号（中村賢「御用日記に残る定時法での時刻記述について」、同「御側向向頭取御用日記（元治元年4月19～23日、着城まで）」、三好康太「文書館による資料所在確認調査について」、柳沢芙美子「福井藩における藩営除痘館の開設とその運営」

□会誌原稿募集／投稿規定

投稿は未発表のもので、完成原稿とします。また、縦書きで三〇字×二三行×二段によるデータ入稿でお願いします（書式が必要な方にはメールで送付いたします）。

次号（令和二年二月末刊行予定）締切は十一月末です。分量は下記目安の数字に収まるようお願いします。本誌二〇ページを超える原稿は、受け付けておりません。

①論文…図・表・註・スペース分を含め、四〇〇字詰原稿用紙五〇枚程度（本誌一六ページ前後）。

②研究ノート・紀行・史料紹介…原稿用紙三〇枚程度（本誌一〇ページ前後）。